



異分野にこそ、新しい発想のタネがある。人材マネジメントや経営学以外の学問、企業以外の人や組織を扱った本に、学びを探る。

## 「自殺の少ない町」の謎を解く

旧海部町<sup>かいふちょう</sup>。徳島県の南端、太平洋に臨む人口約3000人の小さな町は、全国でも突出して自殺率（人口10万人に対し、年間何人が自殺しているかの数字）が低いという。30年間の自殺率の平均値を比較すると、海部町の8.7に対し、両隣の町は26.2と29.7。その地域がおしなべて低いというわけでもない。

当時大学院生の岡氏は、このことに関心を寄せた。現地に何度も足を運び、住民らにインタビューを重ねた定性調査と、海部町やほかの町で何千というサンプルのアンケートを実施した定量調査。両方を組み合わせた研究の成果が、本書のベースになっている。

単純な謎解きとしても十分に興味深い本書だが、ある地域コミュニティの、低い自殺率の研究から見いだされた示唆が、企業の人事の皆さんにも参考になるのではないかな。そう感じたのが、本欄で取り上げた理由だ。

上記のような定性、定量調査を組み

合わせた分析から、岡氏は海部町のコミュニティに、「いろんな人がいてもよい、いろんな人がいたほうがよい」「人物本位主義をつらぬく」「どうせ自分なんて、と考へない」「『病』は市に出せ」「ゆるやかにつながる」という、5つの自殺予防因子を見いだした。

たとえば、「いろんな人がいてもよい、いろんな人がいたほうがよい」。町の相互扶助組織「朋輩組」<sup>ほうばい</sup>に、その特色が表れているという。よそ者、新参者も入退会自由であり、自由意思が最大限尊重される。入会しない住民も、不利益を被ることはない。結果としてメンバーの組織への考えやかかわり方は十人十色となっている。「あえてそれを是としている様子がうかがえます」（岡氏）

「いろんな人がいたほうがよい」は、企業のダイバーシティ推進でもよくいわれる。「多様な意見がぶつかり合い、イノベーションが生まれやすくなる」といった文脈で語られることが多いが、本

著者について



岡檀氏

和歌山県立医科大学  
保健看護学部講師

Oka Mayumi\_慶應義塾大学大学院健康マネジメント研究科博士課程修了。博士(健康マネジメント学)。2012年より現職。コミュニティの特性が住民の精神衛生にもたらす影響についてフィールド調査やデータ解析を重ねている。

書では自殺予防因子として取り上げられている点が興味深い。岡氏の言葉を借りれば、「生き心地の良い会社」を作るという観点からも、ダイバーシティ促進は意義深いことなのかもしれない。

「『病』は市に出せ」は、海部町で岡氏が聞き取った格言だ。悩みやトラブルは抱えずに周りに打ち明ければ、援助の手が差し伸べられるかもしれない。取り返しのつかない事態となる前に、周囲に相談せよという教えだ。

「会社でも『困ったことがあれば何でも相談しろ』と言う上司はいますが、どんな環境にあるから、部下が相談しにくいのかに目を配る必要があります」。岡氏は、海部町には悩みを開示しやすい環境づくりを心がけてきた痕跡が見られるという。それはどんなものなのか、自殺率の高いある町との住民気質の比較から進められる、本書の論考で確かめていただきたい。

わが社を生き心地の良い会社にするため、海部町で得られた知見から「いいとこどり」できる部分はどこにあるのか。そんな観点で一読されることをお勧めしたい本だ。



『生き心地の良い町  
——この自殺率の低さには理由がある』

著者／岡檀  
講談社 1400円＋税  
2013年7月刊行